



最近、本を完読することが難しくなってきました。面白そうだなと思って借りて読み始めても、途中 1/3 くらいのところで返却期限が迫り、どうがんばっても読み終えそうにない。たいして面白くもないけど、結末は知っておきたい。で、最後のほうの数ページをパラパラと読んで、なんや、こうなるんかと。それで読み終えた気になって、ずぼらもええところである。考えたら、今さら本を読んで賢い大人になれるわけでもなく、知識を増やしたつもりでも記憶に残らない。本で励まされたりするほど元気心に飢えてるわけでもなく、本はただの娯楽です。娯楽だから無理して読むこともないのである。

そういえば、連続テレビドラマでも最初からきちんと欠かさず見るものもあれば、まったく見てなかったのに、とりあえず結末の最終回だけ見とこうか…というドラマもある。最後の回だけ見たら、それまでのあらすじも登場人物の人間関係もなんとなく全部わかってしまい、それなりに満足するんである(笑)

そんな私の読書癖でも、1冊の本を1日で読みきったときは、やっぱり、嬉しくもあり、寂しくもあり。あ、もう、終わってしもたと。子どもの頃に見た楽しい映画のエンドマークか、若き日の旅の最終日、列車が大阪駅に到着するときの旅情のわびしさに似ている。

なかなかそういう本にめぐり合うのが難しいなか、最近、1日で読み終えたのは高田郁(たかだかおる)の新しい連続物『あきない世傳2』、第1巻の内容もうろ覚えであるが、読み進むうちにおぼろげにストーリーを思い出していった。早よ、第3巻が読みたい!

作者の高田郁の『みをつくし料理帖』は当欄のNo.52でも紹介したが、半年に1度出る続きが早く読みたくて、図書館で借りるのを待てず、自腹で購入した。2つ目のシリーズものの『あきない世傳』も期待を裏切らない面

白さです。

江戸は享保の時代、兵庫の武庫川村の山里で質素ながらも、私塾で教える父と聡明な兄、母と妹で穏やかに暮らしていた幸。兄に続いて父親を病気で亡くし、暮らしのために、わずか8歳で大阪天満の呉服屋「五十鈴屋」に奉公にあがる。商いに興味を持ちながらも、女中奉公では許されるわけもなく、日々女衆の仕事に励む。頭の回転のよさと商才の芽を感じた番頭がひそかに商い読本を読むことを黙認、幸はいつか自分の手で商いごとを始めたいと思うのである。

「みをつくし料理帖」シリーズでは、主人公の周りが100%善良そのもの人ばかりで、それがなんかうっとうしかったけれど、今回は、根っからどうしようもないアホぼんや、せこくて文句言いのキツイ次男坊や、人物がバラエティに富んできて面白い。それでも親身で優しい先輩女中さんや、幸の良いところを見抜いて商売を教えてくれる番頭さんやお家さん(当主の祖母)など、応援組は事欠かない。五十鈴屋の名ばかりの当主のアホぼんの嫁になり、当主に死なれ、商いの先行きも見通し立たず、前途多難の第2巻が終わった。3巻目ではどんな展開になるんだろう?

私の父は兼業農家の公務員、夫も義父も公務員なので、商売とはまったく関わりがない。子どもの頃、近所の友だちの布団屋さんが夜逃げしたこともあり、自営業などの商売ってたいへんやろうなくらいの思いしかないが、自分の才覚次第で、事業を大きくもできるというのが面白さなのかもしれない。

さて、『あきない世傳』の第3巻が2月に発売された。図書館で予約すると100人待ち。市内の図書館全館で10冊の蔵書はあるものの、うーん半年待ちかな。あらすじも忘れてしまいそうだ。けち臭いこと言わずに購入すればいいんだけど、1巻、2巻を持っていないのに、3巻だけ買うのもなあ。モノを増やしたくないし、これは損得勘定ではなく、終活の一步である。気長に待つ事にしよう。

『あきない世傳』 高田郁 角川春樹事務所